
街のカラス

kamome303

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

街のカラス

【コード】

N9802M

【作者名】

kamome303

【あらすじ】

とある都会にすむカラスが見た人間社会のほんの一片の出来事

オイラはカラス。都会に住む若いハシブトカラスだ。名前は「かあ吉」。

少々ダサイネーミングだが、おいらのねぐらの近くに住んでいる小学生のお譲ちゃんがつけてくれた名前なので、まあ気に入っている。

近頃オイラの仲間たちは、だんだん数が増えてきて、ごみ置き場をあさったり残飯を狙ったりする競争が激しくなってきた。中にはニンゲンに直接攻撃するバカな輩も出てきた。

元々、集団で生活するのがオイラ達の習性だが、この都会では、逆に集団行動するとニンゲン達に目の敵にされるということにオイラは最近気がついた。

まあ、オイラとしては、ニンゲンのような危険な大型動物に無理に逆らって怪我でもしたら馬鹿馬鹿しいので、仲間が暮らしている神社の森から数キロ離れた住宅街にある鉄塔の片隅を住処にしてひとり暮らしをしている。

この住宅街は、戸建住宅が多いものの、特別な建築規制もないのか、アパートやマンションも立っている。今回はその中のあるマンションで見かけたニンゲン達の様子をお話しよう。

それは、ニンゲンがいうところの6月の中旬あたり。梅雨の中休みなのか天気の良い日だった。

その日、オイラは朝から運がよかった。ゴミ捨て場のネットがずれていて、剥き出しになった残飯を発見。ポリウムたっぷりのトンカツにありつくことができたからだ。

燃えるごみの日の月曜日は、ご馳走に出会える確率が高い。

えっ？カラスに暦が解るのかって？バカにしないでもらいたい。

生まれたときから都会で育ち、ニンゲンの生活からでるゴミがオイ

ラたちの主な食料なのだ。その食料が出てくる日を覚えておくのは当たり前である。

それどころか、ニンゲンの話す言葉だってある程度理解している。オイラのくちばしがニンゲンと同じような唇だったら、流暢な日本語を話して聞かせてやりたいところだ。

久しぶりに満腹になったオイラは、昼間だというのに珍しくねぐらのある鉄塔に舞い戻り、いつもの留まり具合のよい鉄骨にとまって食休みを取っていた。

満腹のせいか、なんとなくボヤーっとした目で周囲を眺めていると、少し離れた場所に建っている10数階建てのマンションの一室に金色にキラリと光るものが見えた。

ご存知かと思うが、オイラたちカラス族は光り物が好きだ。なぜかは解らないが、光っているもの、目立つものを見ると無性に近づきたくなる。若いニンゲンの女もそうらしいが「うっとり」してしまうのだ。

その時も、その輝きに惹かれふわふわと飛び上がりそのマンションに近づいていった。

その輝きは、マンションの6階あたりの一室から放たれていた。

オイラは、その部屋に近づくと、人気がないのを十分確認しベランダの手すりに忍者のように音もなく取り付いた。いくら光り物の輝きに惑わされているとはいえ、むやみに危険を犯すつもりはないが、どうしても正体を確かめたくなるような妖しい光りだ。

手すりにつかまって見てみると、ベランダにはエアコンの室外機の外に、50センチ位の大きさの花瓶のようなものが数個転がっている。

部屋の方は、6階という高階のため外の視線を気にしていないのか、ガラス窓が開いていて、カーテンなどの視界を遮るものもない。ベランダにいるオイラからは部屋の中が丸見えである。

せっかくなので中を覗いてみると、金色に輝く門のような形をし

た飾り棚が一方の壁面いつぱいに取り付けられており、その門のな
かには丸いプレートのようなものが貼ってある。

その丸いプレートは、白と黒の2匹のおたまじゃくしがくっつい
ているような模様で、縁は深みのある金色。天井に取り付けてある
照明器具から、そのプレートに向かってスポットライトが当たって
おり、カラスをも惑わせる輝きは、そのプレートが放っていた。

と、その時、

「そうです。この世は陰　んと陽　おうで成り立っています。」
オイラはギョツとして、思わず手すりから落ちそうになった。妖
しい輝きに見とれていたオイラは、すっかり油断してしまい、部屋
の中にいるニンゲンの確認を忘れていたのだ。

改めて部屋の中を探ってみると、10畳くらいの部屋には、3人
のニンゲンがいた。男が2人と女が1人。

今声を発した男は、真つ赤な袴姿で、黄金の祭壇を背に立ちなが
ら、いすに座っている女に向かって話しかけていた。手には、先端
にガラスのようなキラキラした物がついた棒を持っている。

「この陰陽―うを示す太極図を御覧―んなさい。陰と陽が絡み合っ
て円を形作っています。」といいながら、ガラスのついた棒で例の
妖しい光りを放っている白黒のプレートを指し示していた。

「光り―いと影、太陽―おと月、天―えんと地、そして男―おと女、
世の中は、このふた―あつの力のバラーンスで成り立っている―
のです。あなたの今のお悩あ―やみは、この力が一方に傾きバラー
ンスを崩しかけ―ていることから発生している―のです。」

普通に言えば10秒位で終わってしまうセリフを、妙な抑揚をつ
けて一分近くかけてしゃべっている。

「そうです。道師さまの言うとおりですよ。あなたは何も悪くあり
ません。たまたま今、あなたのまわりにある気のバランスがちよっ
とだけ不安定になっているだけなんですよ。」と、もう一人の男が
金縁めがねの奥から細い目をさらに細くして女を見つめながら、こ

ベランダの花瓶と違つところは、口が油紙でふさがれ縁の部分を金色の紐で縛つてあるぐらいだ。

「これは「陰陽の壺」といつて、陰と陽のバランスが崩れたときに、余分な方の気を溜めてくれる壺なのです。また、余分な気だけではなく、いつの間にか忍び寄つてくる邪気も溜めることができます。

邪気というのは本来、奥様のような清らかな人は本能的にわかるものです。なんか変だなと思ったらこの壺に向かって息を吹きかけてください。壺は邪気を吸い取つて溜めてくれます。」

さつきまで大声で泣いていた女は、狸のようなメイクになつた顔をリースのハンカチで拭きながら、キョトンとした目つきで壺を見つめた。

「陰陽のバランスが取り戻せると、彼氏が戻つてくるかもしれませぬね」

ラメの紫服男がさりげなく言つた一言に、女はピクリと動いた。

「お・お幾らかしら？」

女は左手で顔のハンカチを押さえたまま、右手でハンドバツクの中の財布を探し始める。

「そんな・・・お金なんていりませんよ。悪徳靈感商法じゃあるまいし・・・、まあ、ただで差し上げるのもなんですから、お貸しするということががでしょうか。どうぞお持ち帰りください。」

女のハンドバツクを探る手が止まつた。

「え、、よろしいんですの？」

「はい。ただ先ほどお話したように、この壺は気を溜めるだけなんです。ですからやがては気でいっぱいになり溢れてきます。そうなりますと、もう壺は役に立たなくなります。」

「はあ・・・」

「ですが、ご心配は無用です。その時は、またこちらにお持ち下さい。新しい壺と交換いたしますので。お持ちいただいた古い壺は、道師さまが念を送り、いっぱいになつた余分な気や邪気を浄化させ、また使えるように精錬します。」

「そんなんですか・・・」

「まあ、大概の方は、古い壺をお持ちの際、浄化していただく道師さまへの感謝の気持ちとして若干のお布施を置いていかれます。」

「はあ、・・・不躰ですが・・・いかほどですか」

「まあ、あくまで気持ちですので・・・」

と言いながら、ラメの紫服男はおずおずと5本の指を広げて見せた。

「5万・・・ですか？」

「まさか・・・」

「ご、50万?・・・」

「何を言ってるんですか、悪徳商法じゃないんですよ!」

「ご、5千円・・・?」

「まあ、あくまで気持ちですので・・・」

納得したのか、女は視線を壺に戻して、ハンカチでまた目の周りを拭き始めた。

ラメの紫服男は、壺を大事そうに抱え、紺の風呂敷で包み、女に手渡した。

「家に帰ったら、ふたの紙をはずして、部屋の片隅にでも置いてください。すぐに余分な気を吸い始めます。あなたの場合ですと、1週間位でいっぱいになるかもしれませんね。その時は、また紙でふたをして、すぐにお持ちください。」

「いっぱいになったというのは、どうやって判るのですか」

「気ですから、目には見えませんが、あなたのような清い方には自ずと判ると思いますよ。だいたい1週間くらいですね」

なにやらないかげんなことを言っているが、女はそれ以上質問もせずに部屋を出て行った。

道師様がラメの紫服男に言った。

「ふう。これで今日は何人目だっけ。」

「壺を渡したのが3人、壺を交換にきたのが5人、お布施は2万5

千円なり、てな感じだな」

「ふうん、目に見えないものなのにな言われたとおりに持つてくるもんだな。」

「人間つてそんなもんさ、目に見えなければ、言われたことが基準になる。あとは持つてきたときに毎回念押しすればこつちのもんよ」
「でも、目に見えないはずなのに、みんなだいたい気がいつぱいになつているんだよな」

「・・・な、何言つてんだよ、お前、気が見えるみてーじゃねえか」
「なに言つてんだよ、俺あ道師さまだよ。見えるに決まつてるじゃん、てか」

「脅かすなよ、本気にするじゃねーか。俺そついつの本当はダメなんだよな」

「ハハハ・・・わりいわりい、まあでも、あんな壺でも気休めでもいいから、幸せになつてもらえれば気が楽だな。どうせならもつとお布施吊り上げようか」

「それこそ何言つてんだよ、道師さま。単価を安くして、数を多くするのさ。薄く広くだよ。値段を高くしたら、悪徳商法で必ずひっかかるぜ」

「冗談だよ、それに高くしたら、困る会員も出てくるからな。もつと安くしてもいいかもな。・・・俺ら本当の悪人にはなれないな」
「まったくだな、ハハ・・・。しかし、お前のあのしゃべり方は、なんとかならんかね」

「あれがいいんだよ。威厳があつて、後ろの光る祭壇とマッチして神の声に聞こえるのさ」
「そついうもんかねえ」

ラメの紫服男は、そつ言いながらなにげなく窓の方に目をやった。やばい、ベランダの手すりに捉まつたオイラと視線がぴつたりと一致した。

「か・カラスだあ」

おおつと、危ない。オイラは、手すりを軽く蹴り大空に舞い上が

った。

いつものねぐらの鉄塔に帰っていくと、なにやら数人のニンゲンが鉄塔を上ってくる。ヘルメットをかぶり工具袋を腰に巻いている。点検か何かなのか、いずれしばらくは鉄塔には近づかないほうが良いようだ。

さて、ねぐらを追い出されてどうするか。そういえば、ここ最近、仲間にも会ってないなあ。久しぶりに合流するか。そう決めたオイラは、仲間のいる神社の森に向かって針路変更した。

一ヶ月もすると、集団生活もだんだん飽きてきて、あの鉄塔のねぐらが恋しくなってきた。仲間にも別れを告げ、文字通り舞い戻ることにした。

途中、例の妖しく輝く部屋が気になり、近くを通ってみると・・あれ?・・光がない。

ベランダの手すりに捉まってみた。ベランダにはエアコンの室外機以外何も無く、部屋の窓は閉まっている。カーテンもないので部屋の中をのぞいてみると、祭壇どころか家具ひとつない。

完全に開き部屋になっていた。妙な商売だったから、やっぱり捕まったのかな。

あの妖しい輝きがもう見れないと思うと、ちょっと寂しい気もするな、等と思いなから鉄塔目指して再び飛びあがった。

眼下には一ヶ月ぶりのなんとなく懐かしい街が広がっている。

いくら都会とはいえ、住宅街のため一ヶ月くらいでは街並みはそんなに変わらない。

強いていえば、以前工事中だった建物が足場が無くなって仕上げの工事をしていたり、新たな道路工事が始まって交通整理の警備員が立っていたりする程度だ。

オイラが小さな異変に気がついたのは、ベランダの手すりから足を離して翼が上昇気流を捕らえ始めたときだった。

なにげなく下を見ると、マンション近くの小路にニンゲンが

並んでいる。ざっと100人位もいるだろうか。

気になったオイラは、近くの電線に止まって行列の先頭を探してみた。どうやら、この行列は、マンションの近くにある比較的大きめな一戸建ての住宅に続いているらしい。

と、その時、例の懐かしい妖しい輝きが、オイラの脳天を刺激した。その住宅の2階の窓が輝いている。オイラは、またしてもその光りに釣られ、ふわふわとその住宅に近づいていった。

今度のその輝く窓には、ベランダも手すりもないが、幸いにもすぐ近くに電柱があり、うまい具合に留まることができた。その位置からは、部屋の中が丸見えである。

「心配ありません。古い壺は、こちらに置いてください」
おっ、道師さまだ。あの妙なアクセントは健在のようだ。

部屋には、道師さまとラメの紫服男以外に、会員と思われるニンゲンが10人位いた。10人とも例の壺を持っている。そういえば、外に並んでいるニンゲンたちは、みんな壺らしき荷物を抱えていた。道師さまの前には、横長の机が置いてあり、会員たちは持っている壺とお布施の入った祝儀袋をその机に並べて置いた。

「では、ただいまより道師さまが念を送り壺を精錬いたします。」
とラメの紫服男が言うと、真っ赤な袴姿の道師さまは、先端にガラスのついた棒を両手で握り締め、目を瞑りぶつぶつ呪文のような独り言をはじめた。

そして突然、

「う、きゃあああああ．．．ぽぽぽ．．．」

と奇声を上げると、両手にもった棒の先端を壺の口を覆っている紙のふたに突き刺した。

「かぁー」

道師さまは念を送っているらしい。その時、棒の先端のガラスがピカッと光った。

「フンッ」

そう言うと、道師さまは棒を生き抜いて、次の壺に突き刺した。

「かぁー」・・・「ピカツ」と同じ行程を繰り返し、最後の一個が終わり棒を引き抜くと、その棒をうやうやしく上に掲げ、さらに大きな声で

「かああああー」と叫んで頭の上で振り回した。

それに伴い、会員たちは手を合わせ頭をたれて、自らの邪気を払ってもらおうかのように神妙にしていた。

「はい、道師さまありがとうございます。これで皆様がお持ちになった気は浄化されました。お帰りの際、スタッフが新しい壺をお渡しいたしますのでお持ちください。この頃は気候がよく、悪い気は薄れておりますので、次回は10日後位で大丈夫かと思えます。もちろん個人差がございますので一杯になったな〜と思われた方は、お早めにおいでくださいませ。大変お疲れ様でした。」

ラメの紫服男は、そう言うと後ろに控えているスタッフに目配せし、部屋のドアを開け会員の退出を促した。

合図を受けた女性スタッフは、巫女の格好をしており、退出する会員ひとりひとりに新しい壺の入った風呂敷包みをうやうやしく手渡し、最後の一人が退室するとスタッフ自身も外に出て部屋のドアを閉めた。

それまで、ガラスの付いた棒を頭の上に掲げていた道師さまは、大きなため息をついて腕を下ろした。

「ふうふう。あと何人ぐらい待っているのかな。」

「そうだな。まだ100人位はいるみたいだな。本日締めて、200人位つてとこか。」

とラメの紫服男が答えた。

「てえことは、5千円×200人で・・・ウホホ100万くらいだな？」

「まあ、そんなとこだ」

「しかし、こんなに儲かるとは思わなかったな」

「いやあ、まだまだ、そのうちもっと広いところに総本山を作って、

全国から会員が集まるようにしてやるぜ」

「よし、じゃあまず今日の分を片付けちゃおうか」

道師さまがそういうと、ラメの紫服男は近くの壁にある小さなスイッチを押した。

すると、その合図を待っていたかのように、さつき会員達が出て行った扉が音もなく開き、女性スタッフが新しい会員達を引き連れて入ってきた。

と、その時、女性スタッフは偶然にもオイラとばつちり視線が合ってしまった。

「か・からすがこつちを見てるう〜！」

この女性スタッフは、オイラ達カラスに何か特別な恨みでもあるのか、すっとんきょうな声をあげてオイラを指差した。その声につられ道師さまとラメの紫服男もオイラの方を振り返った。

3人に注目されたオイラは、本能的に身の危険を感じ、電柱を思いつき蹴って大空に飛び立った。アブない、アブない、ニンゲンに注目なんかされたら、たまったものではない。

仲間の中には、逆切れしてニンゲンを襲うやつもいるが、そういうやつは例外なく早死にしている。

気になっていた輝きの現状が判ったので、なんとなくホツとしながら、懐かしい鉄塔のねぐらへ戻ることにした。

もうニンゲンたちもいないだろうと思いつつ、懐かしい街並みを眺めつつ、鉄塔に近づいていつてびつくり。なんとオイラの鉄塔は、すすけた緑色の細かい目のネットがすっぽり覆い被さっており、その中で何人もの作業員が黙々と作業を進めている。

さて、困った。

鉄塔の電線をたどっていくと、同じ形の鉄塔があるにはあるのだが、あつちは、風の流れがあまり良くない。それに見慣れない別グループのカラスが時々飛び回っているの、あまり近づきたくないのだ。

しかもよく見ると、そっちの鉄塔も同じようなネットで覆われていて、すでに作業が進行中のようだ。

仕方が無い。また、しばらくの間群れに戻るとするか。そう決心したオイラは、ちよっと名残惜しいので鉄塔の周りを数回旋回し、懐かしい風を翼に感じてから、再び神社の森を目指して羽ばたいた。

真夏の真っ盛りが過ぎて残暑厳しい頃。真夏に比べ若干過ごしやすい季節である。あれから2ヶ月も経っただろうか。真夏の一番暑い時期は、黒衣のオイラにはあの鉄塔よりも日陰の多いこの神社の森の方が住みやすかったので、鉄塔には帰らず仲間たちと過ごした。何の作業なのだろうか、オイラの鉄塔のニンゲン達はもういなくなっただけかな。夏の日差しも少しは和らいできたが、晴天の直射日光は遠出にはまだキツイので、曇りの日を狙って行ってみることにした。

鉄塔へ向かう航路の途中に、例の妖しい光の家がある。知っている人は知っていると思うが、カラスはとても好奇心旺盛である。オイラはカラスの中でもひねくれものではあるが、あの道師さま達がどうなっているか、素通りして鉄塔へ直行できるほどカラス道はずしてはいない。

ということ、妖しい光があるはずのマンション近くの一軒屋に近づいていった。

おっ、見える、見えるぞ、あの輝きが。まだ彼等は続けてやっているらしい。先日と同じように部屋の中が見える電柱に注意深く取り付いた。

「どうしたんだろう、最近さっぱり会員が来ないなあ」

道師さまが、壺を置くはずの長テーブルに、頬杖をつきながら、ガラスのついた棒をいじっている。

「そうですねえ。どうしちゃったんですかねえ」

会員が座るはずの椅子に、巫女の格好をした女性スタッフが一人

座って相槌を打った。

部屋には、道師さまと女性スタッフしかいない。

「せっかく、祭壇もバージョンアップして豪華にしたのに、最近会員さんが激減しましたねえ」

確かに、壁面を飾る黄金の祭壇は、前のものよりデコボコが多くなり、ゴージャスになっている。スポットライトを浴びた丸いプレートも一回り大きくなって、前よりも妖しさ度がアップしていた。

「それがいけなかったのかなあ、それとも壺の効果が薄れたのかなあ」

どうやら、あんなに集まっていた会員が、来なくなってしまったらしい。そういえば、前回来た時、家の外の小路に並んでいた行列が、今はまったく無くなっている。

その時、会員が入ってくるはずのドアが勢いよく開いて、ラメの紫服男が駆け込んできた。

「わ・判ったぞ！」

あまりに慌てているので、一見インテリ風に見える金縁めがねが鼻先までずり落ち、七三にセットされていたであろう髪型は強風にあおられたようにグシャグシャになっていた。

「これだ、このせいで会員がいなくなっただんだ」

そう言いながら、長机の上に30センチほどのガラスのビンをドーンと置いた。

その瓶は、いかにも高級そうなカットが入ったクリスタルで、瓶のふたもダイヤのような輝きを放つガラスでできている。道師さまの持っている棒のガラス玉よりもよほど豪華に見える。

「俺達のやり方をパクったやつがいる。しかもすぐそこ。俺たちが前に住んでいたあのマンションの3階で始めやがった」

「このビンは、」

「俺達は、壺だろう。やつらはこのビンで同じようなことを言って渡しているんだ。しかもお布施は3千円ポッキリ。教祖の格好がア

ラビアンナイト風のスタイルらしく、このビンも豪華に見えるんで部屋にマッチするとかで、うちの会員がそっくり取られちゃった。」
道師さまと女性スタッフは、机の上のクリスタルのビンを見つめて絶句している。

「しかも、やつらは、このビンは俺達の壺よりも性能がいいが、一軒に同じようなものがあると反発してしまうので、この瓶を置くなら壺を割るように言っているらしい。割れた壺から出た邪気はこの瓶が掃除機のように吸い取るそうだった。」

ラメの紫服男は、そう言いながら机をドンと叩き、こぶしを震わせている。

「すると、俺らの壺は、もう、」

「ああ、多分みんな割られてそれっきりだ」

3人はすっかり無言になり、クリスタルのビンを見つめている。

ビンは、よりゴージャスになった祭壇の光を受けてさらに妖しい光を放っていた。

と、その時、オイラの頭に冷たい水滴がポツリと当たった。同時に曇り空のはるか上空で、ゴロゴロゴロ・・と雷の音が響いている。

夕立である。日照りを避け、曇天に来たのがまずかった。1分もしないうちに、大粒の雨がザーッと降り出した。

女性スタッフが、雨音に気付き、窓の方に視線を移した。またしてもオイラと視線が一致。

「か・からすがこつちを見てるぅ〜!」

どっかで聞いたような奇声を放ち、こつちを指差した。

天気も悪くなってきたことだし、ここが引き時と思い、土砂降りに負けないように電柱を強く蹴って雨のなかに飛びあがった。

目指すは、おいらの懐かしいねぐらの鉄塔である。空の上から見ると、夕立の降っているところはベルト状にくっきりと分かれていて、まるで雨のカーテンのようになっていいる。そのカーテン越しに、おいらの鉄塔が見えてきた。

まあ、覚悟はしていたがまだネットははずされていない。残念。よく見ると、格子状に鉄骨が組んである鉄塔の真ん中に、なにやら太い円柱が伸びてきている。まだまだ工事は途中のようだ。いったいつまでかかるやら。

オイラは、鉄塔の周りを数回まわって、またしても神社の森に向かって進路を取った。

秋の風が吹き始めた頃、オイラは三度目のねぐら参りを試みた。

季節としては、オイラは秋が好きだ。都会から出るゴミが主な食料だが、秋になるとやはりゴミに出てくる食料の種類が豊富になる。さらに、都会では数少ないが、カラスの本来の食料である木の実等も食べごろになるので、本能的に気持ちが悪くウキウキしてくる。

それでも日を追うごとに涼しくなっていく風を受けると、冬の到来を予感して身の引き締まる思いもしてくる。

さて、もちろん今回も、例の妖しい光がどうなったか確かめずに素通りするわけにはいかない。

どれどれ・・・おっ、行列だ。前回すっかりいなくなってしまった会員が戻ってきたのか、皆壺らしきものを抱えて並んでいる。

オイラは、いつものように2階が丸見えの電柱に留まり、中を覗き込んだ。

いるいる。道師さまとラメの紫服男だ。女性スタッフもいる。そして会員も10人位いるようだ。

「はい、それではいつものように壺を前に並べてください。道師様が壺を精錬いたします」

ラメの紫服男がそういうと、会員達は道師さまの前にある長机に壺と祝儀袋を並べ始めた。

壺を並べ終わり会場に一瞬の静寂が訪れると、真っ赤な袴姿の道師さまがタイミングを見計らったかのように、ガラスのついた棒を両手で握り締め、目を瞑りぶつぶつ呪文のような独り言をはじめた。

おや、道師さまの持っているガラスのついた棒が、一回り太く立

派になっている。

道師さまは、その棒を振り回し、奇声を上げはじめた。

「う、きゃあああああ・・ばばばうばう・・げげげええ・・ぴぴ
び」

なんか、奇声もバージョンアップしている。

そして前と同じように棒を両手に持って先を壺の口を覆っている紙のふたに突き刺した。

「かぁーっかっかっかっ」

その時、なにやら臭いにおいが漂ってきた。匂いの元はどうも今棒を突き刺した壺のようだ。

道師さまは、棒を壺に突き刺したまま

「フンツフンツフンツフンツ」

と気合を送っている。すると棒の先端のガラス玉がピカツと光り、棒が刺さっている紙との隙間からシューと気体が噴出した。その瞬間に、さっきの匂いはうそのように消えていた。

「キエイイイ」

そう言うと、道師さまは棒を生き抜いて、次の壺に取り掛かった。10個の壺に同じ行程を繰り返し、最後の一個が終わり棒を引き抜くと、その棒をうやうやしく上に掲げ、さらに大きな声で

「かああああーキエイイイー」

と叫んで頭の上で振り回した。すると棒の先端から霧のような白煙が出て、周囲にまだ若干残っていた匂いが全く感じられなくなった。会員たちは手を合わせ頭をたれて、自らの邪気を払ってもらったようにその白煙を浴び神妙にしていた。

ひととおり儀式が終了すると、ラメの紫服男が口を開いた。

「はい、道師さまありがとうございます。これで皆様がお持ちになった邪気は浄化されました。お帰りの際、スタッフが新しい壺をお渡しいたしますのでお持ちください。いつものように壺に邪気が溜まってきますと悪臭がしてきますので、頃合を見計らってお持ちくださいませ。大変お疲れ様でした。」

会員たちは、その言葉に促されるように立ち上がり、女性スタッフと一緒に出口から出て行った。

道師さまは、会員が全員いなくなったのを確認すると、振りかざしていた棒をおろし、

「ふう、あと何人位待っているのかなあ」

と肩をもみながら言った。

「そうだな、あと50人てところか」

とラメの紫服男が机の上の壺とお布施を片付けながら答えた。

「そうか。前ほどじゃないけど、また会員達が戻ってきてよかつたなあ」

道師さまは、ガラス玉のついた棒の真ん中あたりをいじりながらしみじみつぶやいている。

ラメの紫服男は壺を片付けながら

「どうだ、この匂いがきいてるだろう」

と壺の中を覗き込んだ。

「ああ、おまえの友達はすごいなあ」

「あいつは、大学時代から化学が得意だったからなあ。頼んだおりの物を作ってくれた。」

「しかし、どういう薬品なんだろう。塗ったすぐにはちょっと良い香りがして、10日もすると悪臭に変わるけど、このスプレーでたちどころに無臭になるなんて」

と言いながら、道師さまは手に持った棒の先端を触っている。

「なんでも、周りの湿気と反応して臭くなるらしいが、人体には無害なんだそうだ。まあ、邪気が匂ってくるなんて思えば、リアリテイがあるからな。会員も戻ってくる訳だよ」

なるほど、ライバルに取られた会員を取り返すために壺にひと工夫したらしく、それが功を奏したようだ。

そんな会話をしているうちに、壺はきれいに片付けられ、次の会員達を案内する準備ができ、ラメの紫服男は近くの壁にある小さなスイッチを押した。

数秒後、さつき会員達が出て行った扉が音もなく開き、女性スタッフが新しい会員達を引き連れて入ってきた。

どうもこの電柱は、あの扉の位置からちょうど対角線上にあるらしく、今回も入ってきた女性スタッフとばっちり視線が合ってしまった。

「か・からすがこつちを見てるう〜！」

本当にこの女性スタッフは、カラスに何か特別な恨みでもあるのだろう。前回と同じようにすっとんきような声をあげてオイラを指差し、それに釣られて道師さまとラメの紫服男もオイラの方を振り返った。

彼らの近況も判ったし、今日は引き上げるとしよう。

オイラは電柱を強く蹴って大空に飛び上がった。この辺りはマンションからのビル風の巻き込みがあり上昇気流が強いので、上空に上るのは簡単である。

めざすは、懐かしのねぐらのある鉄塔。

うーん、残念。遠目に見てもまだネットははずされていない。よく見ると、格子状に組み込まれた鉄塔の真ん中を、太い鉄柱のようなものが貫いていて、その高さは、鉄塔とほぼ同じくらいになっている。なんか、まだ時間がかかりそうだなあ、と思いながら、三度、神社の森へと進路を変えた。

それから数カ月後、木枯らしが吹きすさぶ中、仲間たちは冬に向けての準備を始めた。

もっとも、都会のカラスたちは、あまり真剣に冬対策を考えていない。おいら達の食料であるニンゲンが出すゴミの量は、冬だからと言って減るわけではない。年間を通してほぼ同じようなものだから特別に冬支度というのは必要ないのだ。

さて、オイラは4度目の正直、ということと、例のねぐらを目指して飛んでいる。風向きが変わり、モロに向かい風なので、なかなか前に進まないが、やっと例の道師さまたちの家に近づいた。

あれれっ？・・・行列が無い。・・・どうしちゃったのかな。これは是非確かめねばなるまい、という変な使命感から、例の2階が丸見えの電柱に降り立った。

部屋には、会員の姿はない。道師さまとラメの紫服男、それに女性スタッフの3人が、壺を置くはずの長机に頬杖をついてたそがれている。

カラスに何かしらの恨みを持っている女性スタッフがつぶやいた。「また、会員さんたち来なくなっちゃいましたねえ」

道師さまが、例の杖を片手でいじりながら、

「そうだなあ、うまく行きかけたんだけどなあ」

ラメの紫服男はライバルが使っているビンを前に置いて腕組みをした。

「あいつら、また新たな手口を編み出したらしい。が、内容がよくわからん。このクリスタルのビンに何か細工したのは間違いないんだが・・・」

「俺らもまた何か考えなきゃいけないかなあ」

その時、ドアが静かに開いて一人の女性が入ってきた。

「あの、壺をお被いしていただきたいんですけどお」

突然の来訪者に3人は一瞬あたふたしたが、すぐにいつものポジションに付くと、道師さまは壺を置くように促した。

「あら、このビンは・・・」

あまりに慌てたものだから、ライバルのクリスタルのビンを机に置いたままだったのだ。

「あのマンションのナントカ教会でくれるビンよね。実は私も行ってみたんだけど、なんか胡散臭いのよねえ。それにこちらはお悩み相談もしてくれるでしょ。最近は忙しそうであまりしてくれなくなっただけ。実は、今日は壺のお被いだけじゃなくてちょっと聞いてほしいこともあるんだけど、いいかしら」

ラメの紫服男は、一瞬道師さまと顔を見合わせた後、「ふっ」と気が抜けたように表情を崩すと「いいですよ。今日はそんなに忙し

くないですから、じっくりとご相談にのりましょう。じゃあ、壺は後で精練しておきますから、先にお悩みをお聞きしましょうか。」とやさしく言うと、道師さまと共に椅子に腰掛けた。

それを見ていた女性スタッフは、

「もう、二人とも人がいいんだから・・・こうなると長いのよねえ・・・」

と小さな声でつぶやき、部屋から出て行った。

オイラは、しばらく3人の様子を見ていたが、なにやら声が小さく、ただしゃべっているだけでつまらなくなってきたので、本来の目的である鉄塔の確認にいくことにした。今回は、女性スタッフのすつとんきょうな奇声を聞かないで飛び上がれるので、なんとなくうれしい。

さて、オイラのお気に入りの鉄塔は・・・おつ、遠目に見るとネットが無い。やっと工事が終わったのか。あれ？近づいてみると、鉄骨が格子に組まれた見慣れた鉄塔はどこにもなく、同じ場所に太い鉄柱の鉄塔が建っている。鉄塔の立替え工事だったのだ。

鉄塔の上の方には、円形の踊り場のような箇所があり、手すりがついている。オイラは、その手すりに止まって具合をみることにした。

手すりにつかまってみると、この場所独特の風と景色が全身を包み込みなつかしさでいっぱいになった。手すりのつかまり具合は前の鉄骨ほどではないが、まあ仕方ない。多分オイラは、この場所の雰囲気と高さ具合が気に入っているんだと思う。

しばらくの間、お気に入りの場所を堪能してから、オイラは飛び立った。次にこの場所に来るのは、春がきてからだ。冬の一人暮らしは都会のクラスといえど危険なのである。

実は今回は様子を見に來ただけで、ここで冬を越すつもりはない。厳しい冬は仲間と一緒に神社の森で助け合いながら過ごしていくのが恒例である。

オイラは、鉄塔の周りを数回廻って風が安定している高めの高度を確保してから、神社に向かって進路を取った。帰りは追い風なので楽だ。

いつもより速いスピードで例のマンションの上空を通過した時、オイラの目に赤色灯の輝きが飛び込んできた。パトカーが数台と赤色灯を屋根に載せた黒塗りのセダンが数台マンションの入り口に集まっている。

なんだろう。好奇心を刺激されたオイラは、見に行こうと思ったが、高度が高いうえ風が強い。

方向転換がきかず、そのまま風に流されてしまった。

まあ、この都会では、パトカーのサイレンや赤色灯は珍しくはない。この逆風に逆らってまで見に行くまでもないだろう。そう思ったオイラは、体制を立て直し仲間のいる神社の森目指して速度を上げた。これから厳しい冬が始まる。

今年の冬は例年に比べ、雪が少なかったような気がする。温暖化の影響なのか、異常気象なのか、いずれにしろ雪が少ないことはオイラ達にとっては好都合だった。雪が降って辺り一面真っ白になると、確かにきれいではあるが、食料も覆い隠されてしまい探し出すのが一苦勞である。

もともと、オイラ達都会のカラスにとっては、食料はニンゲンの出すゴミが主流なので雪の影響は少ない。ゴミ置き場は、場所も時間も決まっているので食いつばぐれることがまずないのだ。カラスにとっては、天国のような場所である。したがって、最近、仲間が増え続けニンゲン社会の中で問題になっているらしい。このまま増え続けニンゲンとの関係が悪化していくと、もしかしたら天国から一気に地獄になるかもしれない。なんとたつてニンゲンは仲間同士さえ殺しあう恐ろしい大型動物なのだから。

さて、今年の冬もなんとか乗り越えられたオイラは、数が増えた

仲間に別れを告げ、あの鉄塔に向かうことにした。

暖かい春風に乗ってゆつたりと飛びながら、懐かしい街並みを眺めてみる。街路樹や庭木等に春の息吹が感じられ心がウキウキしてくる。本来、春は繁殖の季節で相手を探しながら巢作りに励む時期であるが、今年のオイラは、なぜかまだそんな気がしてこない。とりあえず、お気に入りのねぐらを決めてから、じっくり考えることにしよう。などと考えながら例の道師さまの家の上あたりにたどり着いた。

おっ、行列があるじゃないか。でもなんか人数は少ないかなあ。そう思いながら2階の部屋が見える電柱に、気付かれないよう十分注意して取り付いた。

部屋の中には、道師さまとラメの紫服男、それと会員らしい女性が一人の計3人がいる。3人とも椅子に座って話をしているようだ。声が小さくて何を言っているのか聞き取れないが、会員の女性は時折手に持ったハンカチで目の辺りをぬぐっている。

その後、しばらくの間無言の状態が続き、場の雰囲気有一段落着いたような感じになった。

「では、そろそろ、壺を精錬しましょうか」
ラメの紫服男は、そう言って会員から壺を受け取ると、うやうやしく机の上に置いた。

「でえーわ、こーおれからあ、あーあなたの邪気いーいを清よーめまあーす」

道師さまはいつもの変な発音の日本語を繰り返しながら、壺の前に立ちガラスの付いた棒を振りかざした。

おっ、また例の派手なパフォーマンスをやるのかな、オイラは意外とあの棒のひかり具合も嫌いじゃないなあ等と考えていると、

「きえい・・・」

道師さまは、短い気合のような言葉とともに棒を一回まわし

「はい、終　おわりまーあした」

とあっさり儀式を終了してしまった。

「この壺は、あなたの手助けはいたしますが、あくまであなたの気持ちの持ち方しだいですから、がんばってみてください」

ラメの紫服男は、壺を風呂敷で包んで会員に渡し、出口へ促した。「ふう、色んな悩みがあるものだなあ、あと何人くらい待ってるのかな」

部屋に残った道師さまは、会員が去ったあとの椅子や机の位置を直しながら、ラメの紫服男に話しかけた。

「今待っているのは10人位じゃないかな、会員も徐々に戻ってきてるな」

「ああ、そんな感じだなあ、しかし、あの時はびっくりしたよな。あのクリスタルのビンに麻薬を塗って配ってるなんてな」

「ひどい話だよ、だからあんなに繁盛したんだよ。麻薬の力は恐ろしいよな。おかげでウチもとばっちりを食って、家宅捜査されたしな。まあ、ウチの壺もちよつとは細工してたから、どきどきだったよなあ」

「だからそれに懲りて、妙な小細工はやめてまともな陰陽説の人生相談に戻したんだよな。やっぱりまじめにやるのが一番なんだよ」

「そういうことだ、じゃあ次の会員さんに入ってもらおうよ」

そう言つと、ラメの紫服男は壁のボタンを押し、外にいる女性スタッフに合図を送った。

数秒後、女性スタッフが新しい会員を引き連れて入ってきた。

あちゃー、本当にこの電柱の位置は良くない。今回もカラスに特別な感情を持つているらしい女性スタッフとばかり視線が合ってしまった。

「か・からすがこつちを見てるう〜!!」

お決まりのすつとんきょうな声をあげてオイラを指差し、それに釣られて道師さまとラメの紫服男もオイラの方を振り返った。

さて、今回はぼちぼち退散するか。

オイラは、最後に壁にかかっている妖しく輝いている丸いプレートをチラッと見て電柱を思いっきり蹴って飛び立った。

この辺りの風は、本当に心地よい。穏やかな上昇気流に乗ってぐんぐん高度を上げた。街はどんどん小さくなり、はるかかなたには太平洋の水平線も見えてきた。

ニンゲンもこんな風に空を飛べたら、何もあんな変な部屋でごちゃごちゃしなくていいのになあ、と思いながら、オイラはお気に入りの鉄塔のねぐらに進路を取った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9802m/>

街のカラス

2010年10月8日13時40分発行